

変遷

と き
～時代の狭間で～

044 栄東中学・高等学校 鉄道研究部

スモッグ霞む空の下、私は立っていた。

商店街は活気に満ちている。

店主のしゃがれた呼び声と子供のベーゴマの金属音が響き渡る。

鮮やかなみかんと黄金色のコロッケの匂いが混じり合う。

店先からラジオの歌謡曲が風に乗る。

子供の頃母に連れられ、よく来たものだ。

子供たちが都電に向かって手を振る。

運転士も一つの警笛でそれに応える。

幼い頃この黄色い電車でどこまでも、どこまでも行こうとした。

その向こうで高くビルがそびえ立つ。

鳶職の掛け声がこだまする。

これからさらに増えていくのだろう。

いつか新幹線が通った。

一本のひかりの矢が西に向かって風を裂く。

ビルは昨日より一階高くなっていた。

聞くところでは、都電はもうすぐ廃止になるそうだ。

軌道をきしませながら走りゆく都電をみる。

商店街をみる。

視界が滲んだ。

スモッグのせいだろう。

それでも時代は進んでいく。

私を残して。



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品